

## 子どもたちの生命観を育むためには、今私たちは何をすべきか

北海道大学理学院 自然史科学専攻  
鈴木 誠

「今度開催しますので、大学で関心ある人渡してくださいね。誰かいないの?」。研究会でお目にかかる度に、現事務局長の中川美穂子先生から渡される案内で、私は本会を知ることとなった。

命の大切さや生命観の育成の重要性については、昨今起こる様々な事件と相まって、緊急を要する問題としてクローズアップされてきている。身近な自然の減少や遊びの質的变化、ホンモノとの直接体験の不足や核家族化による身近な他者との臨死体験欠如ほか、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化してきた。それらはある程度補完すべき学校教育も、量と質とも大きく変化してきている。現代は、子どもたちが生物の形態と向き合い、それを一つの個体として認識し、正確にそれらを把握していくといった時空の保証ができないところまで来ているのかも知れない。それは、20年前の記憶に遡る。

私は田舎の商業高校で教鞭を執っていた。勉強の嫌いな生徒が多いその学校は、年間退学者が100名近くと荒れていた。私はそこで離任するまで生徒指導を担当した。生徒指導の基本は学習指導である。授業が成立しない教師の言うことなど、生徒が聞く訳がないからである。どうやって生徒の意欲を引き出すか、今の私の専門となる土台がそこにあった。

私は毎年授業開始時に、生徒のレディネスやモチベーションを測る診断テストを行っていた。そこで得た情報を、自分の一年間の指導内容にフィードバックし修正するためだ。その年は、「カエルの絵を書く」という項目を入れた。自然の潤沢な地域ではあったが、ひょっとしたら?という気持ちがあったからだ。30分が経ち、生徒が提出した紙を見た時、私の眼は釘付けになった。そこには二本足のカエルが描かれていた。

農家の長男が書いたものだった。私はすぐに呼び出して確認した。すると、彼は何度も「カエルは二本足だ」と言って私の話を聞こうとしない。困った私は、持っていたカエルの写真を見せた。すると彼は、「それは写真の世界だ、実物は違う」と、まったく譲る気配はない。一人そのような生徒がいるということは、同じ穴の貉がまだ潜在していることを示す。そこで、学年全員の診断テストをチェックした。さすがに二本足はないものの、

前肢や後肢がいい加減なものや稚拙極まりないもの、とても生物とは思えないものまで、驚く世界が広がっていた。猛禽類のフクロウまで生息している地域であるにもかかわらずだ。自然体験の欠如、ホンモノとの体験不足がここまで進んでいるのかと、愕然としたことを未だにはっきり覚えている。

私は自分の授業を大きく変更した。このままでは自分の授業では通用しないと考えたからだ。アメリカの教科書(BSCS)を分析し、学習内容を系統立ててマクロからミクロへと並べ変えた。つまり、生態から入り細胞や遺伝子で終わるのだ。自然体験を重視し、徹底した外部形態や内部形態の学習にも拘った。特に冷凍をくり返しながら、系統解剖に近い詳細な解剖実習を時間をかけて指導した。神経一本、血管一本まで追わせた。さらに全学年を引率して、東大の協力を得て、1日かけての演習林実習も導入した。

ホンモノと直接体験は多くの生徒の心を励起する。問題傾向に走りがちな生徒ほど、学習での反応や卒業時の感想は刺激的だった。が、しかしである。1年間の授業が終了した3月、彼を呼んで再び尋ねると「でも二本足だ」と答え、にやりと笑っているのだ。一度認知された誤概念は簡単には払拭されないことは、**素朴概念(misconception)**の先行研究で明らかにされている。それは、この課題の難しさを示す象徴的な場面でもあった。

命の大切さや他者を思いやる心は、一朝一夕に育つものではない。おそらくそれは、幼少期の家庭環境や生活環境に大きく作用されるのだろう。社会はエセ全盛の時代だ。だからこそホンモノとの直接体験は益々求められている。正しい動物飼育は、その一端を担う。ホンモノとの直接触れあうことや、生物を一つの個体として肌で感じる心、また正確に生物を見る視線を養うことは、命の大切さを育む上で下地を作り、やがて生物教育の基本となる**からである**。

獣医師の方々の積極的な学校教育への支援や、幼稚園や小学校の先生方の実践、行政の斬新な取り組みは、大きな歩みに**違いない**。その接点からは、「二本足のカエル」は二度と生まれまいだろう。またそれは、**21世紀**の生物教育を進める上で大きな力でもあるのだ。